

5 耕作放棄地を利用した但馬牛の出前放牧

はじめに

但馬地域はほとんどが中山間地域であり、担い手の高齢化などで山間棚田では耕作放棄地が増加してきている。一方、兵庫県下各地で繁殖和牛の昼夜放牧が普及してきている。中でも棚田などの遊休農地や山林を利用した放牧は、畜産農家の省力・低コストだけでなく、農地の保全などの側面からも注目を集めている。

取り組み経過

城崎郡日高町の八代集落は、2000年に集落協定を結び、地区内の耕作放棄地5.7haを5年間で復旧しようと試みている。この集落は都市住民との交流にも積極的で、2001年から県が実施している「棚田交流人」（棚田の保全を支援する、意欲あるボランティアを募る事業）活動を行っている（図）。棚田放牧は2002年から実施しており、牧柵の設置は継続的に交流人として参加している棚田ボランティアが行い、牧柵代は中山間地直接支払制度の交付金の一部からまかなわれている（表）。また、頭数確認・補助飼料の給与などの管理は地元集落が行い、畜主は週1～2度の頭数確認を行っている。放牧には脱柵・事故等のリスクが伴うため集落と畜産農家の間で家畜の貸借契約書を交わし、主に以下の3つの申し合わせを行っている。

1. 牛は無償で貸し付け、金銭の遣り取りは一切行わない。

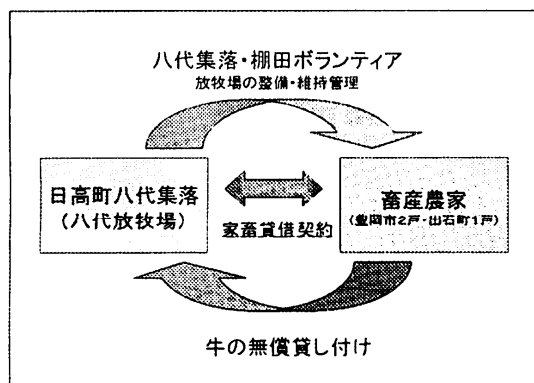


図 畜産農家集落との連携

2. 放牧中の牛の死亡・流産等の事故は畜主が負担する。

3. 放牧中の脱柵による周囲の農作物等の被害については集落が負担する。

八代集落に放牧している畜産農家は町外の比較的平坦地にあり、畜舎付近の山里において放牧する適当な場所が無いことから放牧場の確保に苦慮していた。畜産農家は牛を出前するだけで放牧が可能であり、放牧場の整備も八代集落と棚田ボランティアが行うため放牧管理にかかる労働時間も削減された。

八代集落では、山林に戻りつつあった棚田が以前の景観を取り戻し、放牧の効果に驚いている。また、5月の連休には集落・都市住民と畜産農家が電柵の設置作業を一緒に行った後、合同でバーベキューをするなど交流が図られている。

出前放牧の今後の展開

放牧は牧歌的な風景を提供してくれるという側面もあるが、あくまでも受け入れ集落にとって草刈牛であり復旧後の農地を利用する方法を集落が考えていかなければ再び耕作放棄地に戻ってしまう。出前放牧が集落の農地利用を考えるきっかけとして利用されるならば、畜産農家の放牧地の確保・低コスト・省力化のメリットと合わせて耕作放棄地の解消に役立つものと考えられる。

出水 正紀（豊岡普及センター）

表 八代集落における棚田放牧の推移

項目	2002年	2003年	2004年
放牧面積 ¹⁾	4ha	5.5ha	6.5ha
放牧農家数	1戸	3戸	4戸
放牧頭数	6頭	13頭	18頭
放牧日数	166日	156日	169日 ²⁾

1) 山林を含む

2) 11月9日現在（継続中）